



「ワンヘルス」とは？

小 松 守

(秋田市大森山動物園 園長)

今回は少々かたい話になりそうでご容赦願いたいと思います。

「ワンヘルス」という言葉をお聞きになったことがあるでしょうか。専門家の間でも新しい考え方として登場し始めたもので、一般には未だほとんど普及していないようです。

この考え方（概念）、言葉は21世紀になって聞くようになりました。人の健康、動物（家畜やペット）の健康、自然（環境、野生動物、生態系）の健康は、それぞれが独立しているのではなく、密接に関係しあい、調和したバランスの中にあるのだらうとする考え方です。私たちの健康も人や動物を包み込んでいる自然環境の上にあるということ「ワンヘルス」という言葉に込めているように思えてきます。

One World, One Healthとも言い表し、人、動物、自然の健康を考える各専門分野が連携し、これを考え行動していこうとするもので、医師や獣医師の間でこうした認識が少しずつ広がり、日本医師会と日本獣医師会は連携協定を結び、秋田でも同様の動きが始まっています。

昔は「ワンヘルス」という考え方がなくても人はそれなりに動物や自然とは良い付き合いをしてきたのかもしれない。自然の中に生かされながら人は動物や自然に対し、時に恐怖や畏敬の念を抱きながら絶妙な距離感の中、人の領分をわきまえながら、調和し生きてきたのかもしれない。

人は今、高度に発達した文明を手に入れ、加率的に人口を増やししながら、人の生き方を最優先にしがちです。その結果、人、動物、環境との関係性やバランスがどこか崩れ、歪んで来ているようにも感じるものがたくさんあります。

人口が増えるにつれ食糧の増産や家畜の数が増え、豊かな生活を追い求めるほど経済活動は盛んになります。その結果、自然環境への負荷はどんどん大きくなり、生態系にどこか歪みやアンバランスが生じ、自然環境が保っていた健康は少しずつ損なわれてきています。

また、都会での便利で豊かな生活は人と動物、人と自然との関わり方にも影響を与え、物理的、心理的な距離を大きくさせてきました。

人、動物、自然（野生）との関係性の調和に乱れやバランスの崩れが出始めた時代になり、これまで大きな問題にならなかったようなことが、時に顕著化し注目しなければならないことも起き始めてきました。

その一つは人獣の共通感染症やこれまで経験しなかった新興感染症です。また、今まで効果のあった抗菌薬が効かなくなってしまうという薬剤耐性菌の問題もクローズアップされるようになってきました。

生態系の乱れや悪化の影響は、動植物種の絶滅や異常増殖などは見えやすいので知られていますが、それだけではありません。微生物レベルでの生態系でも同様なバランスの崩れも想像

され、これまでなかったような微生物の登場や変異などが起きることが出てきても不思議ではありません。目に見えない微生物の乱れが全体の健康に影響する様子は、私たちの腸内細菌の乱れに例えたらわかりやすいかもしれませんね。

「ワンヘルス」の対象分野は様々ですが、人と動物の共通感染症、人を支える食物である家畜の疾患、環境に蔓延し始めた薬剤耐性菌などが重要なテーマとなっているようです。人やモノがボーダーレスに素早く動く現代社会では、感染症や薬剤耐性菌の広がりも速く、グローバルな視点で捉える必要があります。

「ワンヘルス」について、2016年11月に大森山動物園で経験した高病原性鳥インフルエンザ（以下、HPAI）の発生を例にあげ、人と動物の共通感染症と重ねて考えてみたいと思います。

鳥インフルエンザウイルスは水鳥など多様な野鳥に感染しながら生き続けている鳥のA型インフルエンザウイルスです。ウイルスは生きた細胞に感染しないと生き続けることのできない微生物で、感染鳥の体内からは約2週間で排出され、次の鳥に再び移り生き続けてきました。野鳥にどの程度の高い病原性を示したかはよくわかってはいませんが、自然（野鳥）の中でウイルスがめぐりながら、鳥と共に生き続けていたのかもしれない。

しかし、人が食糧生産のため養鶏という集約的なニワトリ飼育を始めると、そこに感染したウイルスが変異し強毒性を持つものが現れたのです。それがHPAIウイルスとされています。なぜニワトリで変異したのかはよくわかりません。素人の勝手な想像ですが、クローンにも似る同形質のニワトリが高密度に飼育される養鶏場はウイルスにしてみればまたとない増殖施設みた

いなものだったのでしょうか。ちなみに現在の世界中のニワトリ数は約210億羽、世界の人口が約72億人ですから、一人約3羽分を生産している勘定で、ものすごい数です。

ニワトリで高病原性を得たウイルスは野鳥に漏れ出し感染し、冬の渡り鳥などとして次々と各地に運ばれ養鶏場などに伝播し大変な流行を起こしているのです。2年前の発生は近年にない大流行で、国内野鳥の死亡検体数は220羽程度でしたが、ニワトリの殺処分数は約170万羽にもなりました。ウイルスの広がりを防止するためです。国内動物園でも秋田・大森山と名古屋・東山動物園で発生しました。

「ワンヘルス」として問題になるのは人獣共通感染症です。一般にHPAIウイルスは人に感染しません。ただ、ニワトリへの感染で変異したことを考えると、ニワトリでの新たな変異、人感染での変異は未知の領域です。

中国や東南アジアでは死亡感染事例が発生していますが、市場や家庭でのニワトリの食肉処理、取り扱いが考えられないほど濃厚なことが原因とも言われています。これらの地域はブタ飼育も多く、ウイルスがブタに入ると人へ感染しやすくなるとも言われています。人への感染でウイルス変異が起きると新型インフルエンザになる危険性もはらんでいます。

感染症をテーマにした2011年公開の映画「コンテイジョン」は鳥インフルエンザがモデルのようですが、人間の自然に対する圧力と驕りも根底に描かれていました。「ワンヘルス」という言葉をきっかけに、動植物種絶滅と同じように、目に見えない微生物の生態系世界での異変、そして人、動物、自然との関係性について、時に思いをめぐらす必要があるかもしれませんね。